

日英語に見る主体の捉え方

嶋 村 誠

I はじめに

図1は、オーストリアの物理学者であり哲学者であるエルンスト・マッハが、ソファーに横たわって右目を閉じたときに左目に映る映像を描いたものである¹⁾。自分の眼窩の縁、鼻、口ひげに囲まれた枠内に、手足など自分の体の一部と周囲の状況が見えている。自分で自分自身の姿を描いていることにもなるので、この絵は「マッハの自画像」と呼ばれることも多い。自画像を描くというと、鏡に映った自分を絵として描く、つまり外部から見た自分を描くのが一般的であろうが、この絵は自分の体の内部から直に自分を眺めるという体験をそのまま描いたものである。その点で、一般的な自画像とは捉え方が大きく異なっている。マッハの自己の捉え方は、その後次のように他の分野にも影響を与えることとなった。

図2は、マッハの自画像にヒントを得たアメリカの生態心理学者ジェームズ・ギブソンが、視野に映る「視覚的自己 (visual ego)」を描いたものである²⁾。それまでの心理学の手法は、あくまでも他者の心理学でしかなかったが、生態心理学によるアフォーダンスの理論によって、それまでの考え方を根本から変える新しい「自己」の捉え方が可能となった。

1) Mach (1914, 19)。Gibson (1950, 28) には、同じ絵が “The Monocular Visual Field of Ernst Mach” というキャプションとともに掲載されている。

2) Gibson (1950, 227)。



図1 Mach の自画像

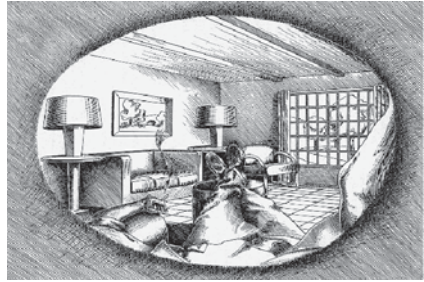


図2 Gibson の視覚的自己

さらに、マッハの捉え方はフッサール現象学にも影響を及ぼしたようである。「超越論的自我は自転車に乗れるのか」という疑問に対する回答として、超越論的自我は、図3のように「外部から眺められるような（そして外部からその存在を確かめられるような）物体ではな³⁾く、図4が示す通り、マッハの絵のように自転車に乗ることができると答えられている。

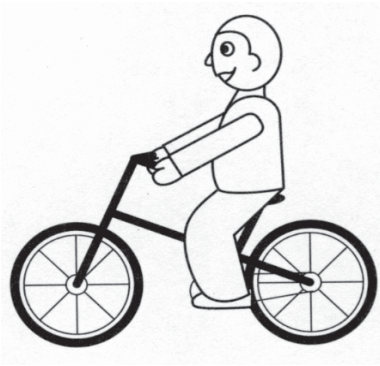


図3



図4

もう一度、図1－図4を眺めてみよう。図3には、ヒトを外部から情景の一部として捉え、乗っている自分の体だけでなく顔も描かれており、どちらを向いているかなどの情報も直接絵のタッチによって描かれている。一方、

3) 谷 (2002, 178)。図3、図4も谷 (2002, 179) より。

図1、図2、図4は、ヒトの内部から情景が捉えられており、人（自分）の顔はほとんど描かれていないか、描かれていてもほんの一部だけである。すなわち自己が環境の見えの中に埋め込まれてしまっており、自己が視野のなかに入っているとは限らない。それにもかかわらずその絵から、自己がどこにいて、どちらに向いているか、また、複数の絵を描くならば視線と情景との角度をもとにして、どちらの方向に動いているか、なども容易に知ることができる。それゆえ、自己が環境を知覚することは、たとえ自己が視野に入っていないか、自己を知覚することにもなるのである。言い換えると、「世界を知覚することは自己を知覚すること」(Gibson 1979, 141) といえる。Neisser (1988) は、このように環境の知覚を通して知覚される自己を「エコロジカル・セルフ (ecological self)」と呼んでいる⁴⁾。

II ことばに見るエコロジカル・セルフ

ことばにもなんらかのかたちで自己が表現されていると思われるが、上述のエコロジカル・セルフという自己の知覚のしかたがあるとするならば、それがことばに影を落としていても不思議ではない。そこで、Langacker (1990, 20) の次の例文を用いながら、ことばに見る自己の特徴を考えてみよう。

- (1) a. Vanessa is sitting across the table from me.
b. Vanessa is sitting across the table.

(1a)においては、いま話し手が現実にはテーブルの前に座っていて、そこからヴァネッサを見ているという解釈もできるが、これとは別に、話し手がいまテーブルとは別の場所において、そこから話し手自身とヴァネッサとを見ている、すなわち、主体である話者自身をもう一人の自己が見ているという

4) 佐々木 (1993) は、認知科学における「エコロジカル・セルフ」についての要領よいまとめとして参考になる。

解釈も可能である。一方、(1b)においては、話し手はことばになって顕現化していないため、詳細が語られているわけではないけれども、現実にはテーブルの前に座っていて、そこからヴァネッサを見ていると感じられる。

したがって、(1a)は自己を客観的に見ているということになり、(1b)は主観的に見ていることになるであろうから、(1a)と(1b)の間には客観性の違いが見られると捉えることもできよう⁵⁾。すなわち、(1a)の場合には(1b)よりも客観性が強い表現であり、一方、(1b)の場合には(1a)よりも主観性の強い表現ということが言えよう。

以下では、(1a)のように、主体の外部からのカメラ・アングルで自己を捉えられている表現方法を、便宜上「主体外部型把握」と呼び、(1b)のように、主体の内部からのカメラ・アングルで捉えているものを「主体内部型把握」と呼ぶことにする。

Ⅲ 日英語における主体の捉え方

三上章(1960; 1963)が、日本語には主格はあるが西洋語のような主語はないという主張を繰り返したことは広く知られている。また、鈴木(1973)を通して広く知られるように、英語の *I*、*you* に相当する日本語には、それぞれ「わたし、ぼく、おれ、わし」「あなた、君、おまえ、貴様」などいくつも表現があり、どの表現を選択するかは、話し手や聞き手が誰であるか、その両者がどのような社会的関係にあるか、また発話がどのような場面で行われるか、によって左右される。英語においては、話し手や聞き手が誰であれ、また両者がどのような社会的関係にあるかに関わらず、話し手自身のことは常に *I* と呼び、同様に聞き手のことは常に *you* と呼ぶのが一般的である。一方、日本語には上記のように話し手や聞き手を指す表現がいくつもあるが、英語と比べると、それらが用いられる頻度は極端に少なく、全く用いないで発話が行われていることも稀ではない。

5) これら2つの文における客観性の差異については、Langacker (1985) を参照のこと。

例文(1)を用いながら考えた通り、話し手 (*me*) がことばとして姿を現している(1a)では、主体である話者自身をもう一人の自分が見ている、すわなち話し手が視点を自分の外に置いて自分を眺めている。上記のように英語では話し手が自分のことを一貫して *I* で言い表すことが容易でかつ頻繁に行われるのに対して、日本語では、英語と比べて話し手自身を表すことばが用いられる頻度が少ないことから、次のような仮説を立てて、そのことがほかにどのような働きをしていると考えられるか検証することによって、嶋村(2014, 1章)における考察を一步前進させることにしよう。

- (2) 英語においては、視点を主体から移動して、主体の外部から主体を眺めることが容易であり、そのようにする傾向が強いが、一方、日本語においては、視点を主体の内部においたままにする傾向が強い。

IV 人間の全体と人間の一部

國廣(1974b, 48)は、日英語表現構造の対応のひとつとして、英語では人間を全体的に捉えて言及する傾向が見られるのに対して、日本語は人間の一部のみを捉えて言及するという特性があることを指摘している。

次の(3)–(11)において、英語では、一個の人間を全体的に捉えることばで表現されているのに対して、日本語では、一個の人間の一部分だけを捉える表現が用いられている。その対象は、体や体の部位のこともあれば、心理状態などが体の一部として捉えられていることもある。(11a)では、人間を全体的に捉えた *he* が用いられているのに対して、(11b)の「意欲」は、一種の心理状態を表す語で、人間の一部に言及していることばと考えられよう。

- (3) a. What a long hair you've got!
 b. あなたの髪は長いわね。(江川 1964, 224)
- (4) a. He was red in the face.
 b. 顔が赤かった。(江川 1964, 118)

- (5) a. I have a pain in the knee.
 b. ひざが痛い。(江川 1964, 118)
- (6) a. I was feeling weak in the legs.
 b. 脚がまいっているような感じがした。(江川 1964, 118)
- (7) a. He has an eye for paintings.
 b. 彼には絵を見る目がある。(江川 1964, 369)
- (8) a. Fortunately, it was a small knife, and the bone was hard, so I still have my thumb. (Soseki Natsume, *Botchan*, Alan Turney 訳, 9)
 b. 幸いナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。(夏目漱石『坊っちゃん』, 7)
- (9) a. I was so annoyed that I flung the rook I was holding at his head. (Soseki Natsume, *Botchan*, Alan Turney 訳, 13)
 b. あんまり腹が立ったから、手にあった飛車を眉間へ擲(たた)きつけてやった。(夏目漱石『坊っちゃん』, 9)
- (10) a. This so took me aback that I opened my mouth and let out a peal of laughter. I woke up with this, to find the maid opening the shutters. (Soseki Natsume, *Botchan*, Alan Turney 訳, 25)
 b. おれがあきれ返って大きな口を開いてハハハハと笑ったら眼が覚めた。(夏目漱石『坊っちゃん』, 19-20)
- (11) a. I myself have been working for nearly ten years now. . . . Except for pressing business or an emergency, he has no wish to change his route to work, even though he ought to be thoroughly sick of it. (Tatsuo Nagai, "Morning Mist," Edward G. Seidensticker 訳, 304)
 b. 実はこの私も今日まで十年近く、勤め人生活を営んで来ている者であるが……家を出てから、勤め先へ達する順路にしたところが、よほどの用事か突発事故のない限り、毎日通い飽きているはずの道順を、変更する意欲は起きないものである。(永井

龍男「朝霧」, 15)

ここで、I 節で見た図 1、図 2、図 4 を思い出していただきたい。これらの図は、知覚の主体が環境の見えの中に埋め込まれてしまっていて、主体の全体が視野のなかに入っていない場合でも、体の一部が視野のなかに入っていることは可能であるということを示唆している。ということは、日本語において、体の一部によって主体が捉えられるということと、主体がエコロジカル・セルフで捉えられているということとは、両立することであり、矛盾することではないと考えて差し支えないことを示している。

V 人間中心と状況中心

國廣 (1974b, 47) や Hinds (1986) は、英語が人間中心的な表現を前面に押しだそうとするところを、日本語では状況中心の表現にしようとする傾向があるという点も指摘している。

いくつか例文を挙げてこのことを確かめておこう。(12)-(14)の英語例文 a は人間が主語とされていることから明らかなように、人間中心の捉え方であるが、日本語はすべて状況として表現されており、そこに人間が表現として表れていない。窓口の係員が切符の売り切れを告げるときの発話である (14) にも同じ傾向が見られる。

- (12) a. He made a nice start.
 b. 出足は好調だった。(江川 1964, 27)
- (13) a. I've got an important business just now.
 b. いま大事な用があるのです。(江川 1964, 224)
- (14) a. We are sold out.
 b. 切符は売り切れました。

英語においては、仮説(2)の通り、(13)(14)においても、主体の視点が移

動して、主体の外から(13a)においては自分を、(14a)においては自分たちを眺めている。すなわち主体外部型把握が行われている。一方、日本語文では、いずれも主体が表現として顕現化しておらず、エコロジカル・セルフとしてその存在が理解されるだけである。日本語についてもやはり仮説(2)の通り、主体の視点は移動しておらず、主体は環境の見えのなかに埋もれて主体内部型把握が行われている。

先ほど挙げた例文(11)でも、英文(11a)においては、人間である *he* が主語として表現の中心に据えられているが、日本語文(11b)において、人間は顕現化した表現の位置から退いて、心理的な状況である「意欲」が表現の中心を担っている。同じ趣旨のことについて述べようとする文でありながら、日英語の間でこのような表現構造の違いが見られる。

所有文にも同様の特徴が見られ、仮説(2)に沿った捉え方が行われていることが確認できる。

- (15) a. ‘We haven’t many left.’ (Arthur Hailey, *In High Places*, 36)
 b. 「もういくらも残ってないわ」(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 46)
- (16) a. ‘But I’ve had it [narcissism] for years.’ (Arthur Hailey, *In High Places*, 10)
 b. 「それなら何年も前からわたしに取りついているさ。」(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 9)
- (17) a. Faded paintwork had great patches of rust extending over superstructure, doors, and bulkheads. (Arthur Hailey, *In High Places*, 54)
 b. 色褪(いろあ)せたペンキのあちこちに大きな錆が浮きだして、船の上部構造やドアや隔壁に拡がっていた。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 71)

この節で考察した英語と日本語の違いは、日本語の特質について書いた佐久間鼎の次の指摘とも符合している。

- (18) ヨーロッパ風の表現における……特徴を、かりに人間本位的といふならば、日本語におけるものは、むしろ自然本位的あるひは非人間的ともいへる…… (佐久間 1941, 211)

VI 他動詞文と自動詞文

Hinds (1986, 53-54) は、次の例文(19)-(23)を挙げながら、英語が他動詞構文を好むのに対して日本語は自動詞構文を好むことを指摘している。

- (19) a. I just heard shouting.
b. 叫び声がしたぞ。
- (20) a. I see a/the mountain.
b. 山がみえる。
- (21) a. . . . I was building up a solid and almost complete framework for my thesis
b. . . . 骨組みだけはほぼできあがっているくらいに考えていた私は
- (22) a. Oh, I spilled it.
b. あ、こぼれちゃった!
- (23) a. Oh no, I broke it.
b. あ、われちゃったわ。

これらの文においても、他動詞文が用いられている英語においては視点が主体から移動して外部から自分を眺めているのに対して、自動詞文が用いられている日本語においては、視点は主体から動かず主体内部型把握が行われている。それにとまって主体は表現として顕現化せず、エコロジカル・セ

ルフとして理解されるだけである。

この英語と日本語の違いは、日本語の特質について書いた佐久間鼎の次の指摘とも符合している。

- (24) 日本語ではとかく物事が「おのずから然る」やうに表現しようとする傾向を示すのに対して、英語などでは「何者かがしかする」やうに、さらには「何者かにさうさせられる」かのやうに表現しようとする傾向を見せてある…… (佐久間 1941, 214)

一方、英語で自動詞によって表現するところを、日本語では他動詞によって表現せざるをえないものもある。

- (25) a. . . . and now the *Vastervik* [a ship] was berthing gently, its big hook dragging like a brake on the silt-layered, rock-free bottom. (Arthur Hailey, *In High Places*, 46)
- b. ……いまや《ヴァステルヴィク》は岩のない沈泥層の海底にその大きな錨爪をブレーキのように引きずりながら、ゆったりと停泊していた。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 60)
- (26) a. It [the ship] made fast at La Pointe Pier (Arthur Hailey, *In High Places*, 9)
- b. 同船は……ラ・ポワント埠頭に繫留された。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 7)
- (27) a. ‘Yes, I’d heard the invitation had gone.’ (Arthur Hailey, *In High Places*, 17)
- b. 「招待状が送られたことは聞いている」(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 18)
- (28) a. Her husband smiled, his heavy-lidded eyes crinkling. (Arthur

Hailey, *In High Places*, 10)

b. 夫はぼつてりと厚い脛に皺を寄せて笑った。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 9)

(29) a. Anything else, she decided, could wait until after the holiday.
(Arthur Hailey, *In High Places*, 77)

b. ほかの仕事は休暇あけまでのばすことにしよう、と彼女は決めた。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 104)

そういう場合の例文を通して観察されることは、英語において自動詞表現の主語になっているものが、日本語の動詞の対象を表すものに対応していると考えられることが多いということである。それゆえ、基本的には英語のSV構文に日本語のOV構文が対応し、日英語で同じ名詞が主語に選ばれているときには、英語の自動詞文が日本語の受け身文と対応していることになる。なお、(29b)の「は」は、ヲ格と主題を兼務している「は」である。

英語で自動詞によって表現するところを、日本語では他動詞によって表現せざるをえないこれらの例文においても、日英語いずれも仮説(2)に矛盾した捉え方がなされていると思われるところはない。このことは、英語と日本語が他動詞文と自動詞文のどちらを選択するかということと、仮説(2)は矛盾するものでなく、むしろいずれを選択した場合にもこの仮説に沿った捉え方が行われていることを示唆している。

VII HAVE 言語と BE 言語

世界の言語を言語類型学的に眺めると、所有の概念を表す特別の語が備わっている言語と、存在を意味する表現で所有の概念を表す言語とがあり、英語の所有と存在を表す動詞の HAVE と BE を用いて、象徴的に前者の型を HAVE 言語と呼び、後者を BE 言語と呼んで区別することがある⁶⁾。

6) HAVE 言語と BE 言語の区別については、Issatschenko (1974), 池上 (1981), Mathesius (1975) などが参考になる。なお、英語の have の各種用法と分析について

例えば、典型的な HAVE 言語と考えられる英語の(30a)において、文構造の上で **Mary** が所有者として表現されているが、BE 言語の日本語文(30b)では「メアリー (に) は」という存在場所として表現されている。

- (30) a. Mary has two children.
 b. メアリー (に) は子供が 2 人ある [いる].

こうした英語の所有文の主語としては、(30a)や(31a)のような人間だけではなくて、(32a)のように無生物も所有者としての扱いを受けることがある。無生物にも人間と同様の資格を与え、「何者かがしかする」という表現に引き込んでいるわけであるから、(32a)は、V節で述べたように、人間中心の表現をすることを好む英語の特徴が現れている表現の一つであると考えることができよう。一方、日本語の方は、(31b)も(32b)も内容的には人間に関することでありながら、「没人間的」な、状況指向型の表現になっている。

- (31) a. He had not intended to become heated but he had a sailor's contempt for shorebound officialdom. (Arthur Hailey, *In High Places*, 50)
 b. 彼はむきになるつもりはなかったのだが、船乗りの常で陸上の役人どもを目の敵にするようなところがあった。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳, 66-67)
- (32) a. Richardson laughed, though the laugh had a hollowness. (Arthur Hailey, *In High Places*, 80)
 b. リチャードソンは声をたてて笑ったが、その笑いにはうつろな響きがあった。(アーサー・ヘイリー『権力者たち』永井淳訳,

は、Bach (1967), Bowers (1981) が詳しい。

108)

(33a)の英文に対しては、英語の限定修飾構造にからむ対応パターンを利用した(33b)のような対応も日本語として有効な表現方法と考えられる。

(33) a. His face was small and white and he had tight lips. (Ernest Hemingway, “The Killers,” 24)

b. 顔は小さく色白で口もとがひきしまっていた。(ヘミングウェイ「殺し屋」大久保康雄訳, 181)

つまり、英語の‘A(名詞)+have+B(限定形容詞)+C(名詞)’を日本語では‘A(名詞)は+C(名詞)が+B(叙述形容詞)’に変えて、「象は鼻が長い」式の表現にすることが可能なわけである。

これら所有表現を好む英語文とそれに対応する日本語表現としては、存在表現を好む日本語文についても、主体の捉え方を示した仮説(2)に矛盾すると思われる点は見いだせない。なお、本節の特性は、V節でとりあげた人間中心と状況中心の捉え方とも密接に関係している。

VIII 時制の一致

時制の使い方について、日本語と英語の間にはいくつかの違いが見られる。たとえば、日本語の小説では、過去についての描写をする場合に、最初にタ形(完了相)を用いることによって、読者に以下の記述内容が過去のことであることを知らせておいて、それ以降はル形(未完了相)とタ形を織り交ぜる、という手法がよく用いられる。一方、英語ではそのような場合に、次の例に見られるように、一貫して過去形で表現される。もちろん、英語にも、歴史的現在の用法がないわけではないが、日本語の場合と平行して用いられるわけではない。

- (34) a. The boy passed through the already deserted playground of the elementary school and climbed the hill beside the watermill. Mounting the flight of stone steps, he went on behind Yashiro Shrine. Peach blossoms were blooming in the shrine garden, dim and wrapped in twilight. From this point it was not more than a ten-minute climb on up to the lighthouse.

The path to the lighthouse was dangerously steep and winding, so much so that a person unaccustomed to it would surely have lost his footing even in the daytime. But the boy could have closed his eyes, and his feet would still have picked their way unerringly among the rocks and exposed pine roots. Even now when he was deep in his own thoughts, he did not once stumble. (Yukio Mishima, *The Sound of Waves*, Meredith Weatherby 訳, 6-7)

- b. 若者はすでに深閑としている小学校の校庭を抜け、水車のかたわらの坂を上った。石段を昇って、八代神社の裏手に出る。神社の庭に夕闇に包まれた桃の花がしらじらと見える。そこから燈台まで十分足らず登ればよいのである。

その道は実に崎嶇としていて、馴れない人は昼でもつまずくだろうが、若者の足は目をつぶっていても松の根や岩を踏み分けて行くことができた。今のように、ものを考えながら歩いていてさえ、つまずかない。(三島由紀夫『潮騒』, 8)

このように、時制の一致の原則が守られる英語と違って、日本語においてタ形とル形の間を行ったり来たりすることにどのような働きがあるか考えてみよう。日本語において、最初にタ形を用いて過去についての描写であるということがすでに確立しているコンテキストのなかで、あえてル形を使って読者を過去の場面に連れていくなれば、あたかもいまその現場にいるかのような臨場感を抱かせる効果が出てくる。これはとりもなおさず、執筆してい

る現在の時点（読者にとっては、読書時）に心理的視点を置いて（いわばそこにカメラを置いて）過去の出来事を眺めたり、出来事の起こった過去の時点に心理的視点を切り替えて（いわばカメラを移動して）、それを目前で起こっている出来事として眺めたりするということが行われることを意味している。一方、英語では、心理的視点を執筆時（あるいは読書時）に固定しておいて、常にそのカメラ・アングルから眺めるという方法がとられるために、過去の出来事は過去形（あるいは過去完了形）で表されるのであると考えることができよう。つまり、時制の一致をめぐる観察される日英語の間の違いを心理的視点の置き方の違いとして捉えることができる。

- (35) a. Had he wanted to find a prostitute in his bride? There was astonishing ignorance in the fact, and Shingo felt in it too a frightening paralysis of the soul.

Did the immodesty with which he spoke of his wife to Kinu and even to Eiko arise from that same paralysis? (Yasunari Kawabata, *The Sound of the Mountain*, Edward G. Seidensticker 訳, 105)

- b. 修一は新妻に娼婦をもとめていたのだろうか。おどろいた無知だが、そこにはまたおそろしい精神の麻痺があるように、信吾には思えた。

修一が妻のことを絹子や、また英子にまでしゃべる、つつしみのなさもこの麻痺から来ているのだろうか。（川端康成『山の音』, 121）

日本語の例文(35b)において、「そこ」は完了相の文の中で使われており、執筆時（読書時）に視点を置いて、そこから過去を眺めるという形をとっているのに対して、視点を移して、「この」という指示代名詞が使われると、それに伴ってル形（未完了相）となって現在に変わっており、視点の変化と相まっている。ところが、英語の方は、一貫して過去時制が使われており、

指示代名詞 *that* が使われていることから見ても、視点の移動が生じていないことが分かる。このように、指示代名詞と時制に関わる現象をめぐる日英語の違いも、英語は視点の一貫性を強く求めるが、日本語は視点の移動を許す、という視点の問題として捉えることができる。

こうしてみると、英語と日本語の時制の選択は、一見仮説(2)の真逆のように思えるかもしれない。しかし、ここでよく考えておかなければならないのは、日本語の場合に心理的視点の移動が効果的にしかも頻繁に行われると、いっても、あくまでも主体内部型把握を伴った移動であり、主体内部型から主体外部型への移動ではないということである。一方、英語においても、一貫した心理的視点が好まれるといっても、一貫して主体外部型把握の姿勢が維持されている点に注意する必要がある。このように、時制の選択の違いも、本稿の仮説(2)に矛盾する言語事実ではなく、むしろそれに沿ったものであることを示唆している。

IX 統一主語の要求

英文作成のためのハンドブック（例えば、Leggett, Mead, and Kramer [1985] など）には、同一文中に節がいくつか出てきても、途中で主語をむやみに変えるなど教えているものが多い。その理由の一つには、久野(1978)のいう「視点」の問題が関係していると思われる。話し手（あるいは書き手）は、視点を主語に置くことが最も容易であり、聞き手（あるいは読み手）も、その発話を受け取る時に、主語に視点を置きながら解釈するのが最も自然である。ところが、短時間のうちに主語が頻繁に変えられると、視点をあちこちと変えなければならないため、聞き手（あるいは読み手）に大きな負担がかかることになる。主語をむやみに変えてはならないという原則は、日英語のどちらにもあてはまると思われるが、次の実例などを見ると、英語の方が日本語よりも、主語の統一を要求する度合いが高いようである。

- (40) a. I was much impressed with her close-knit tidiness; then, when the

husband sat facing me, I was still more impressed, somehow, by the simple fact that age had come upon him. It was not an impression of unhealthiness. It was a feeling of, literally, age. (Tatsuo Nagai, "Morning Mist," Edward G. Seidensticker 訳, 305)

- b. 老夫人の眼立って小じんまりされた様子に、まず私は驚いたが、続いて向い合ったX氏の、老い込まれた感じは一層私の胸を打つものがあった。不健康というのではなく、それは文字通りに老い込まれた感じで…… (永井龍男「朝霧」, 16)

英語の方は、(40a)のように主語を *I* に統一してあるので、読者が心理的な視点を移動する必要がない。しかも、*I was impressed* という同じ構文が繰り返されているし、2番目の方には *more* がつけられていて、書き手の意図が明確にされているために、焦点がはっきりしており、読者に対する負担は非常に少ない。一方、日本語の方は、最初は「私は」が中心に据えられているながらその直後に「私の胸を打つものが」に中心が移されているにもかかわらず、読者への大きな負担は感じられない。むしろ、こうした変化をつけることによって、表現にバラエティを持たせる効果がでるし、しかも強く心打たれたことがうまく表現されている、と言えるのではなからうか。では、もしも、英語の例文 (40a) の最初の文の中で、2番目の主語を変えたらどうであろうか。例えば、後半の主文を能動態にして *I was much impressed with her close-knit tidiness; then, when the husband sat facing me, the simple fact that age had come upon him still more impressed me, somehow.* とすると、読者にかかる負担が増えると同時に、焦点がぼやけてくる。

これらの観察から、統一した主語を要求するかどうかという問題は、英語の方が、心理的視点の固定化を強く求めるのに対して、日本語では視点がある程度移動してもかまわない、という一般原則の違いとしてとらえることができそうである。

この統一主語の要求に関しても、英語と日本語の時制の選択の場合と同様

に、一見仮説(2)の真逆のように思えるかもしれない。しかし、統一主語の要求の場合も、日本語において心理的視点の固定化がある程度移動してもかまわないといっても、あくまでも主体内部型把握を伴っての移動であり、主体内部型から主体外部型への移動ではないということに注意しておかなければならない。一方、英語において、心理的視点の固定化を強く求めるといっても、一貫して主体外部型把握の姿勢が堅持されているという点に注意する必要がある。このように、統一した主語を要求するという点についても、本稿の仮説(2)に矛盾する言語事実ではなく、むしろそれに沿ったものであることが確認できる。

X おわりに

以上本稿では、日英両語の間に見られるいろいろな表現構造の違いの背後に、主体がどこに視点をおいてどのようなカメラ・アングルから事態を把握しているかを観察した。英語においては、視点を主体から移動して、主体の外部から主体を眺めることが容易であり、そのようにする傾向が強いが、一方、日本語においては、視点を主体の内部においたままにする傾向が強い、という仮説を立てた。そのうえで、いくつかの日英語表現構造の違いの中でその仮説に沿った把握が行われているかどうかを検証し、仮説通り、あるいは仮説に矛盾するところはない、という結論を得た。今後さらに、この仮説と、把握に関する他の仮説との相互関係について検証する必要がある。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

引用例出典

- 江川泰一郎. 1964. 『英文法解説』改訂新版. 金子書房.
 Hailey, Arthur. 1970. *In High Places*. Pan Books.
 ヘイリー, アーサー. 1979. 『権力者たち』永井淳訳. 新潮文庫.
 Hemingway, Ernest. 1968. "The Killers." In *Snow of Kilimanjaro*. Penguin Books.
 ヘミングウェイ. 1988. 「殺し屋」『ヘミングウェイ短編集 1』大久保康雄訳, 179-97. 新潮文庫.
 Kawabata, Yasunari. 1971. *The Sound of the Mountain*. Translated by Edward G. Seidensticker.

- Tokyo: Charles E. Tuttle.
- 川端康成. 1970. 『山の音』新潮文庫.
- Mishima, Yukio. 1961. *The Sound of Waves*. Translated by Meredith Weatherby. Tokyo: Charles E. Tuttle.
- 三島由紀夫. 1967. 『潮騒』新潮文庫.
- Nagai, Tatsuo. 1962. "Morning Mist." Translated by Edward G. Seidensticker. In *Modern Japanese Stories*, edited by Ivan Morris, Tokyo: Charles E. Tuttle.
- 永井龍男. 1968. 「朝霧」『永井龍男・阿部知二』日本文学 62. 中央公論社, 14-30.
- Natsume, Soseki. 1972. *Botchan*. Translated by Alan Turney. Tokyo: Kodansha International.
- 夏目漱石. 1989. 『坊っちゃん』岩波文庫.

参考文献

- Bach, Emmon. 1967. "Have and Be in English Syntax." *Language* 43: 462-85.
- Bowers, John S. 1981. *The Theory of Grammatical Relations*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Gibson, Eleanor Jack. 1993. "Ontogenesis of the Perceived Self." In *The Perceived Self: Ecological and Interpersonal Sources of Self-Knowledge*, edited by Ulric Neisser, 25-42. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibson, James J. 1950. *The Perception of the Visual World*. Boston: Houghton Mifflin. 東山篤規・竹澤智美・村上高至訳. 2011. 『視覚ワールドの知覚』新曜社.
- Gibson, James J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳. 1985. 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社.
- Hinds, John. 1986. *Situation vs. Person Focus*. Tokyo: Kurosio.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店.
- Issatschenko, Alexander. 1974. "On Be-Languages and Have-Languages." In *The Proceedings of the Eleventh International Congress of Linguists* (Bologna-Florence, Aug. 28-Sep. 2, 1972), edited by Luigi Heilmann, 2(1): 71-72.
- 國廣哲彌. 1974a. 「人間中心と状況中心—日英語表現構造の比較」『英語青年』119(11): 688-90.
- 國廣哲彌. 1974b. 「日英語表現体系の比較」『言語生活』270: 46-52.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- Langacker, Ronald W. 1985. "Observations and Speculations on Subjectivity." In *Iconicity in Syntax*, edited by John Haiman, 109-50. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1990. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Leggett, Glenn, C. David Mead, and Melinda G. Kramer. 1985. *Prentice-Hall Handbook for Writers*. 9th ed. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

- Mach, Ernst. 1914/1996. *The Analysis of Sensations and the Relation of the Physical to the Psychological*. Translated from the first German ed. by C. M. Williams, revised and supplemented from the fifth German ed. by Sydney Waterlow. London: Routledge/Thoemmes Press. 須藤吾之介・廣松渉訳. 1972. 『感覚の分析』法政大学出版局.
- Mathesius, Vilém. 1975. *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis*. Edited by Josef Vachek. The Hague: Mouton.
- 三上章. 1960. 『象は鼻が長い』くろしお出版.
- 三上章. 1963. 『日本語の論理—ハとガ』くろしお出版.
- Neisser, Ulric. 1988. "Five Kinds of Self Knowledge," *Philosophical Psychology* 1(1): 35-59.
- 佐久間鼎. 1941. 『日本語の特質』育英書院.
- 佐々木正人. 1993. 「エコロジカル・セルフ」(認知科学の新しい動向<エコロジカル・アプローチへの招待>6) 『言語』22(6): 94-99.
- 嶋村誠. 2014. 『日英語に見るもののとらえ方』関西学院大学出版会.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』岩波新書.
- 谷徹. 2002. 『これが現象学だ』講談社現代新書.